

民間歌曲にみるウイグル人の地域的多様性

鷲尾 惟子

ウイグル人のその躍動感ある歌や踊りに関しては、かねてから現地を訪れた探検家の旅行記やメディアなどを通じて、わが国でも比較的馴染みあるものだと言えよう。また、近年では、古典伝統芸能であるウイグルの「ムカーム」が内外で注目されつつあり、2005年においては、ユネスコ世界文化遺産に認定されたことで、当芸能がウイグル人の間だけでなく、中国国家の伝統芸能としても称揚される傾向も見られる。しかし、今日もなお、音楽研究としては、その研究対象がもっぱらムカームに集中しており、現代ウイグル人の生活により密着した民間の歌舞音曲においては、若干の学術的記述が見られるものの、未だ深く掘り下げられているとは言えない。

このような現状を踏まえ、本発表では、中国新疆のウイグル人の間で歌われている民間歌曲に焦点を当て、その多様性、および各オアシス地域の音楽的特徴について述べた。

まず、ウイグルの音楽ジャンルとしては、前述のムカームや民間歌曲のほかに、舞踊曲、器楽曲、語り物、現代においては歌謡曲などが挙げられる。これらのジャンルは、各々独立しているわけではなく、相互に関連し合っている。例えば、器楽曲や民間歌曲の中にムカームの1節が借用される場合や、語り物が歌曲とともに交互に歌われる場合もある。とりわけ、民間歌曲は専門的な音楽知識がない地元の人々でもその節回しから、どの地域の歌か推察することができることとされ、同じ新疆内でもその様式を異にする。民間歌曲の主たる内容としては、ラブソングを筆頭に、月や花など自然を題材に歌ったもの、家族や友を歌ったもの、労働歌などがある。

現在、この民間歌曲においては、イリ、トルファン、クチャ、カシュガル、アトシュの5地区が主たる地域と考えられ、カセットテープやVCDなどが新疆各地で散見されると共に、現地ウイグル人の聞き取りからも窺える。また、これら5地域に加え、サブ地域として考えられるのが、コムルのほか、近年注目されつつあるヤルカンド河からタリム河流域にかけてドラン人が居住していたとされる地域、ほかにホータン地区やチャルクリクからコルラにかけての地域が挙げられる。この点に関して筆者が注目しているのは、第一にこれら民間

歌曲の代表的な地域として、イリやカシュガル、トルファンなどの主要都市と肩を並べて、小都市であるアトシュが挙げられていることである。第二点として、逆にホータンのような、歴史的にも都市の規模としても知名度が高く、しかも人口の大半をウイグル人が占めているような地域が、代表的地域として挙げられていないことであった。この点に関しては、さらなる調査が必要であるが、ウイグル人の主要な都市と民間歌曲の代表的都市が必ずしも一致するわけではないという点で、興味深い点である。

各地域にある民間歌曲の音楽的特色としては、東洋的な響きをもつ5音音階が主にイリやコムル、トルファンなどの東疆・北疆において多く見られ、クチャやアクス、ドラン地域など、新疆のやや中央部の地域においては6音音階、そして、カシュガルやアトシュ、ホータンなど西・南疆においては、イスラム的な音程「(ぞう)2度」を含む7音音階が多用されている傾向がある。民間歌曲の基本的な演奏形態としては、現代風にアレンジされたものは別として、歌の旋律と伴奏である楽器はユニゾン形式をとり、中には西洋音楽ではあまり聴かれない中間音(微分音=半音のさらに半分の音程=1/4音)や装飾音なども含まれている。また、音の跳躍や音程、歌の節回しとしては、特にイリのものが歌の最高音と最低音の音域が広く、低音から高音、あるいは高音から低音にかけてずり上がり/下がりを見せる。また、イリの歌は、一つの節を歌う場合でも言葉から言葉へ複数の音を経て、一つの言葉となっている。これに対し、ホータン民間歌曲においては、音の跳躍が少なく、旋律よりもリズムやことば重視の傾向が見られる。

こうした音楽上における差異は、各オアシスの多様性を浮き彫りにするだけでなく、今日のウイグル人にとって、各オアシスの出身であるというアイデンティティの拠り所にもなっていると推測できる。また、最近ではこれまで注目されていなかった地域の民間歌曲も、メディアやVCDなどを通じて普及すると共に、ウイグル人のみならず、異国的旋律を好む中国人のユニットの間でリリースされる傾向も見られる。現代において、ウイグルの民間歌曲を考察する場合、様式の解明などと併せて、今後は中国という中での変容の様態も踏まえつつ、研究を行っていくことが課題であろう。

(奈良女子大学大学院人間文化研究科博士前期課程)